

# 言葉は鏡

坂綾・坂出中 三宅 葵

『ごんぎつね』に出てくる単語の意味を辞書で調べていきなさい

当時大学生だった私を含む学生たちは、ひたすらに品詞分解と意味調べを繰り返した。恥ずかしながら、私の記憶に蘇るのは、作業の膨大さばかりで、作業を繰り返した結果、得られたものが何だったのか思い出せない。この場をお借りし、冒頭部分に限定して、当時出された課題に再挑戦したい。

## 1 語釈の抜粋

語句	語釈
むかし	長い年月をへた以前。
中山さま	新美南吉の故郷である岩滑（やなべ）の領主だった中山家。
ひとりぼっち	仲間・寄るべなどがなく、ただひとりであること。
しだ	羊歯類に属する植物の総称。
茂る	草木が大きく生長して葉や枝が多く出る。
いたずら	悪ふざけ。わるさ。
ばかり	ある特定のことだけをしきりにする。
たり	一例として挙げ、他にも同様の事があるのを暗示する時使う。
菜種から	アブラナの種を収穫した後の茎などの残骸。かまどの火をおこす際の燃料として使われる。
むしりとる	物の一部分を無理やり引きちぎったり、引き抜いたりして取る、転じて無理やり奪い取る。

とんがらし	「唐辛子」の変化したものの。
百姓	農民。
いろんな	「いろいろな」のくだけた言い方。

## 2 考察

「これは、私が小さいときに、村の茂平というおじいさんからきいたお話です。」という冒頭に始まり、具体的な地名や人名が多く登場する。また、村人の暮らしを想像させる言葉も多く、あえてくだけた口調が用いられている。「火縄銃をばたりと、とり落とし」た後の兵十が、「いたずら」「ばかり」しているとわかれてきたごんの行いを誰かに語って聞かせたこと、そしてそれが、おしろのなくなった現在に至るまで語り継がれてきたことを示唆している。

本作における額縁構造は、ひとりぼっちのごんへの救いになっているのではないか。「おれにはお礼をいわないで、神さまにお礼をいうんじやアおれは、引き合わないなあ。」と思いつつも、こっそり栗を運ぶごん。彼の行いを語り継いだことによって、「おれと同じ一人ぼっちの兵十か。」と理解し合える存在を求めたごんの願いが叶えられたと想像したい。

ごんと兵十の心が、ごん亡き後に結びついたり、のかもしれないと想像させることで、物語の切なさが一層深まると同時に、ほのかな温かさが心に灯る。

## 3 教職6年目の思い

三浦しをん作『舟を編む』の一節に、「たぐさんの言葉を、可能なかぎり正確に集めることは、歪みの少ない鏡を手に入れることだ。歪みが少なければ少ないほど、そこに心を映して相手に差しだしたとき、気持ちや考えが深くはつきりと伝わる。」とある。

「ひとり」でよいところを「ひとりぼっち」と、「とんがらし」でよいところを「とんがらし」と表記した作者の思いに寄り添える読者でありたいと思う。また、そのような子どもを育てたい。